

「農福連携推進東北ブロックシンポジウム」を開催しました

全国及び東北地方における農福連携に関わる情報や取組を紹介し、また農業と福祉のつながりを広く展開するためのきっかけづくりとして、平成30年1月25日(木)に、東北農政局主催による「農福連携推進東北ブロックシンポジウム」を開催しました。

本シンポジウムには、主に障がい者の就労支援に取り組む福祉団体や農業者、行政機関など約120名の皆様にご参加頂き、取組事例の発表のほか、福祉団体、農業者、及びそれらのマッチング組織がパネルディスカッションを行いました。



シンポジウム会場の様子

【基調講演】

テーマ：「農業分野における障がい者就労の展開方向」

講師：「特定非営利活動法人 HUB's」 理事長 ^{はやし} ^{まさたけ} 林 正剛 氏

農業従事者の減少や高齢化、耕作放棄地の拡大など日本の農業の現状を踏まえつつ、ご講演をいただきました。

農家側の抱える労働力不足の解決の一助となるため、障がい者側では、農家側の期待に応えられるレベルの技術を持ち、農業へ就労すること目的とした農福連携の考え方を持つことが必要である。

また、その先には、障がい者が地域農業にしっかりと役割を持ち、さらに広い視野では、地域づくりの担い手としても必要不可欠な存在になることが理想であるとの提言でした。



【施策紹介】

「障がい者が農業等への就労を支援する制度」や「法定雇用率の改正」について、東北厚生局、宮城労働局、東北農政局から情報提供を行いました。

【事例発表】

① 自ら農業に取り組む福祉施設

「非営利型一般社団法人かたつむり」 法人常務理事 おおにし ともふみ 大西 智史 氏
(岩手県大船渡市)

東日本大震災の被災から立ち上がり、自らの農業生産とそれらを加工する6次産業の取組や、それを通じた課題について発表されました。

また、農作業に障がい者が関わる事が出来るように工夫すれば、高齢者など誰もが安心して働ける環境づくりにもつながるという可能性を示唆されました。



② 福祉施設と農家のマッチング組織

「三八地域障害者農業就労促進ネットワーク」 事務局長 ぬまた ともみ 沼田 智美 氏
(青森県八戸市)

障がい者が細かな手作業から力仕事、仕分けや梱包など多種多様な作業で得た経験は、他業種でも応用することが可能である。

農業を足掛かりとした就労を通じて障がい者の社会参加が促進されることで、ともに地域を支えていく存在となるような、協働のまちづくりを目指している旨を発表されました。



【パネルディスカッション】

基調講演講師の林氏をコーディネーターとし、事例発表者2名に「NPO 法人 ワーカーズコープ こころード」(福祉団体)のよねや けいこ米谷 圭子 氏と「ユッキーファーム」(農業者)のささき ゆきお佐々木 幸雄 氏を加えた4名のパネリストでパネルディスカッションを行いました。

マッチング組織、福祉団体、農業者それぞれの立場から、取組当初の感想を始めとして、農福連携を実践する中で工夫していること、また良い点や難しい点などについて議論がなされました。



こころード 米谷 氏



ユッキーファーム
佐々木 氏

最後に、それぞれのパネリストから、

- ・ 高齢者、生活困窮者や引きこもりの方を支援している他の団体との連携も考えていく必要がある。
- ・ 農作業の技術を向上させて、農家の収入増加につながれば信頼が得られ、工賃の向上につながる。また、商工会とのつながりが販路の拡大に有効。
- ・ 障がい者が伝統工芸品や地域固有の産物の生産を受け継ぐ役割を担うことが可能。
- ・ “継続は力なり” 自らが受け入れ続けることで、周囲の農家の理解を得られている。

との意見を頂き、締めくくりました。

【質疑応答】

パネルディスカッション終了後の質疑応答では、参加者から、

- ① 農作業が出来ない冬期の工夫
- ② 農家からの依頼に対応する福祉団体の確保
- ③ 新たな受入れ農家の開拓
- ④ 工賃増加のために有効な方策

に関する質問が出されました。

それに対して、パネリストからは、

- ① 温室等の施設がある農家と関係があれば良いが枝拾いやビニールハウスの撤去程度で、年間雇用は難しいのが現状
- ② 福祉団体向けの研修会を開催、農家から具体的な作業内容を提示して頂き事前に準備する
- ③ 農業者の集会に出向いての PR、農家向けの見学会や研修の実施
- ④ 正直、農家側から工賃の増額についてはなかなか言い出さない、農作業技術の向上と施設職員が農家とよく話し合うことが大事、通常の生産だけでなく、育苗の請負い、商品開発や加工品製造に携わることも有効

との回答を頂き、本シンポジウムを終了しました。